

八百富神社

八百富神社は、蒲郡市の沖合に浮かぶ竹島に鎮座する神社である。全長 387 メートルの歩道橋が本土と竹島を結んでおり、緑豊かな植生の中に本殿などいくつかの神社が建っている。八百富神社の歴史は 12 世紀まで遡るが、島はそれよりも遥か昔から神聖視されていたと考えられている。神社と島は境内を横切り、海沿いの岩場に沿って橋まで戻る散策路で探索できる。

由緒ある過去

八百富神社は、藤原俊成（1114-1204）が三河国（現在の愛知県東部）国司を務めていた 1181 年に創建した。この神社の初期の歴史については確実なことが多く知られていないが、社伝によると、俊成は京都近郊の琵琶湖の小島、竹生島にある同じような神社に親しみを覚えた。

竹生島の神社は、水にまつわる神、ひいては芸術や文化の守護神とされている弁財天を祀った。俊成は竹島にその分霊を勧請したため、八百富神社の祭神も弁財天である。俊成が琵琶湖から一对の竹を持ち帰り、島に植えたとされている。竹島という地名も、この伝承に由

来すると考えられている。

藤原俊成の後に登場した多くの著名人も竹島の風景に感銘を受け、島の神秘的な力を信じてきた。2世紀半の間、日本を支配した幕府の創始者である徳川家康（1543-1616）は、戦場での幸運を祈願するために1600年に竹島に立ち寄った。20世紀初頭には、ノーベル賞受賞者の川端康成（1899-1972）を含む多くの著名な作家が、海辺の旅館「常磐館」に滞在しながら島を訪れた。

いくつかの神社

八百富神社の境内には本殿の弁財天のほか、4つの神社がある。「宇賀神社」は商業や食物の神を祀っており、商売繁盛を祈願する信者が多い。「大黒神社」は繁栄の神を祀っており、商人、農民、料理人の守護神とされている。「千歳神社」は藤原俊成を祭神としている。

最後の「八大龍神社」は海の神様を祀っており、竹島の元祖の神社としても知られている。竹島は俊成が来島するはるか以前から、海にまつわる神々の住まいとして信仰されていたと考えられている。この神社もまた、八百富神社本殿と同様、北を向いているのが特徴だ。一般的に神社は南向きが最も縁起が良いとされているが、竹島では人々が暮らす本土を見守るため

に、逆の配置が採用されたのかもしれない。

壮大な緑（竹島：天然記念物）

竹島は昔から神聖な場所とされているため、何世紀もの間、新しい樹木や他の植物が持ち込まれることがなく、本来の植生が保たれている。島全体が常緑の暖帯林に覆われており、本土の松林や橋の向こうの丹念に手入れされた芝生とは対照的だ。

230 種を超える竹島の植物の中で特筆すべき種は、高さ 30 メートルに達し、森の他の部分より高くそびえ立つ広葉樹のタブノキ (*Machilus thunbergii*) や、濃い緑色の葉に香りがあり、光沢があり、3 本の特徴的な葉脈があるヤブニツケイ (*Cinnamomum yabunikkei*) などである。数種類のシダ、つる植物、低木が密生した下草を構成している。木々の下には、キノクニスゲ (*Carex matsumurae*) という、とがった種子の頭を持つ草のような植物も生息している。キノクニスゲは亜熱帯地域に多く、日本の太平洋岸では竹島以北に生育していない。

神社の境内は歩道橋から始まる舗装された遊歩道を通って本殿まで行くことができる。そこから島を横切り、他の神社を通り過ぎ、海辺へと下っていく。遊歩道は海岸線に沿って橋まで戻

る。のんびりと島を一周するのに 30 分ほどかかる。

山車の祭り

竹島を訪れるのに最も人気のある時期のひとつが、10 月の第 3 土曜日と日曜日に行われる八百富神社の例大祭である。竹島の大黒神社の神を含む、日本神話や昔話に登場する七福神を祝う舞が行われ、八百富神社の 18 の氏子地区を代表する山車が本土を練り歩くな

ど。